

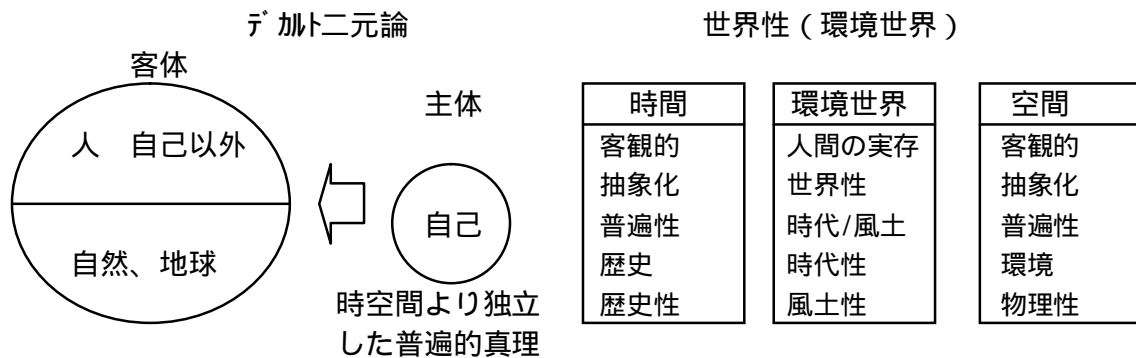
村 ュスタン・ベル著 篠田勝英訳 「地球と存在の哲学 環境倫理を越えて」

ちくま新書（1996年9月初版）

人間の行為は自然に対して変化を与えてきた。近代文明の環境に対する影響は不可逆的かもしれない、しばしば制御不能を呈し地球上での人類の生存をも危機に陥れている。人はその本性において他の生物と異なるところは文明を持つこと、倫理的に自分を律せること、可能性を選択できることである。人である私たちだけが地球を修復することができる。本書はそのための処方箋を考える環境哲学のひとつである。東洋的に自然との一体化という考えを排し、あくまで西洋哲学の流れ（デカルト二元論の主体を固持）のなかで近代の克服を企てるものである。環境保護のあまり人類の主体性の制限を意味する環境ファシズムに陥いることは厳に避けなければならない。近代性を拒否して縄文文化への回帰や母型への郷愁を理想とすることは論理的に破綻している。本書の提案を「風土的つながり」、「倫理の場所」、「帰属と自由」に分けて展望する。哲学術語という業界専門用語を極力排して自分の言葉で解説する。

1) 風土的つながり

近代理性と文明を作ったデカルト的二元論と、その克服を狙うハイデッガー、和辻らの世界性（環境世界）を比較的に示す。



あらゆる環境政策の存在論的倫理的基盤は、人間の住いとしての地球（空間的、文化的システム媒体）で楽しく生きられるための秩序、美観、清潔、静けさといった倫理的義務を人間の価値とすることである。人は風土の中で倫理的に生きることが出来る。

2) 倫理の場所

責任の概念が初めて倫理の分野に現れたのは18世紀の個人主義の確立後であった。村の連帯責任や集団責任のなかでは責任は拡散され無責任体制となる。主体性の場所が個人の時に最高の倫理性が存在する。環境への責任と義務は個としての主体性にしか発生しない。個体の自然と人類に対する義務は同じ次元にあることが持続的発展の論理である。環境全体論のように個体の主体性を抑制することは絶対にあってはならない。誰が自然を語れるのか、それは人以外には有り得ない。

3) 帰属と自由

デカルト二元論は主体の独立により自由を得て近代文明を築いたが、帰属の論理との対立を招いた。近代主体性は地球環境に対して無制限の自由を持つべきではないが、過去への帰属は何も生まない。風土の論理は私たちに風土の存在者を尊重すること（帰属）を倫理的に要請する。自然文化への帰属を利用して自由を得る論理を確立すべきである。